

日本近世儒学思想史の一スケッチ

巖 錫仁（倫理研究所客員研究員）

はじめに

本稿では、一般に江戸時代、また歴史上の時代区分の用語としては近世と呼ばれる時代、ことに前時代とは異なる近世独自の制度・文物や文化が確立・整備されていく18世紀半ばまでのいくつかの儒学思想家に焦点を当てながら、その日本的な特徴の一断面をスケッチしてみたい。

明治時代に儒学による国民道徳の確立に努めた井上哲次郎は、日本における儒学、とくに朱子学について「我邦にありては朱子学は古学及び陽明学に先ちて起り、且つ徳川氏三百年間の教育主義として学术界の重鎮となり、思想界の根底を成せり⁽¹⁾」と、その影響力を高く評価していた。また朝鮮の李退溪と江戸儒学の関係を長年研究した阿部吉雄は、日本の歴史の中で平和と秩序が続き保たれた時代として上代の律令国家、江戸時代、明治時代を挙げながら、「これらの時には、いずれも儒教が指導思想となっていたといつてよい。律令国家時代は儒教文化の咀嚼時代であり、江戸時代は消化時代であり、さらに明治時代はこれを血となし肉となし、その上に西欧文明を輸血した血肉化の時代である⁽²⁾」とし、日本の統一国家の形成・発展・一大革新の時代にはいずれも儒学がその推進力となっていたと診断する。上代と明治時代はともかくとして、江戸時代において長い戦乱を終息させた徳川家康は「馬上をもて治むべからざるの道理をとくより御会得ましまして、常に聖賢の道を御尊信ありて、おほよそ天下国家を治め⁽³⁾」たといわれているが、その後幕府や各藩によって推進されてきた儒教的な政策やそれを直・間接的に支えた数多の知識人層（儒学者）をみると、これを抜きにしては日本思想（江戸思想）や日本文化・生活を語ることは無理があるように思われる。

しかし、これに反対する意見もむろんある。戦前では津田左右吉が代表的で、「我が国においても知識として儒家の教が学ばれもし講説せられもした。しかしその教の具体的表現であり実践的規範である礼は曾て学ばれたことがなかった。……従って儒教の道徳教は、古往今来、曾て吾が国民の道徳生活を支配したことが無かったのである⁽⁴⁾」と、儒教は中国人の特殊な家族制度・社会組織・政治形態に基づいて作られたもので、それと様相を異にする日本の生活とは無縁であったという主張である。この津田の主張はその後しばらくはあまり振るわなかったが、1960年代以後、これを継承する多くの学者達によって再び注目を集めている⁽⁵⁾。中国は差し置いて、外来思想の儒教をもって政治や生活全般を支える揺るぎない理念として発展させていた朝鮮時代と比較すれば、このような儒教影響力否定論は確かに一理あるように見える。日本では儒教官僚制（科举制）は一度も採択されることがなく、江戸時代の儒学者は政治権力の周辺に寄生する制度的な疎外階層であり、もし政治的・社会的に影響力を行使したとしても、それは全体から見れば結局少数者に過ぎなかった。また一般の生活における儒教儀礼の普及にも極めて消極的であったことも、儒教影響力否定論の一例として挙げられる。

前で日本における儒教影響力をめぐる肯定論と否定論の両方の主張を紹介したが、一方的にどちらが正しくてどちらが悪いという判断は容易ではなく、またあまり意味を持たない問いのようにも思われる。ここで仮に後者の否定論を取るとしても、それで問題がすべて解決されるわけではなく、そこからまた新しい問題が提起されるからである。儒学の影響はなかったとしても、多くの知識人達が見る立場によっては少数にすぎず、単なる知

的な遊戯になるかも知れないが 外来思想としての儒学をめぐる真摯な探求や苦悶を続けたとするならば、これをどう評価すべきかという問題がそこにある。江戸時代における朱子学者・反朱子学者という異なる学派の競い合いは、まさにその探求や苦悶の結果であり、その格闘の結果がいわゆる 日本的儒学 を構成する内容となる。本稿ではその 日本的儒学 を念頭に置いて、日本近世思想史をリードしていったいくつかの主要な学者達の特徴的な思想営為を垣間見たいと思う。